

広井良典著『創造的福祉社会』（ちくま新書、2011年）

これまでも著者は、環境・福祉・経済を統合した「定常型社会」、「持続可能な福祉社会」という概念を提起してきたが、本書では、これまでの内容に新たに“創造”という要素を加える。そして、その意図を、『定常』あるいは最近話題になっている『脱成長』という表現を使うと、“変化の止まった退屈で窮屈な社会”というイメージが伴うかもしれないが、それは誤りだと指摘し、「定常期」は「文化的創造の時代なのである」と、発想の転換を呼びかけている。

ところで、「定常型社会」についてはじめに確認しておく、これは、著者の考える『資本主義の進化』という文脈のなかに位置づけられている概念である。

本書では、これまでの資本主義社会について、前産業社会、産業社会・前期、産業社会・後期の3つの段階にまとめられている。そして、それぞれの社会における富の源泉を、土地、労働（所得）、消費と特徴づけ、源泉が変化してきたゆえに、政府による税制にも、地租、所得税・法人税、消費税が、順次、現れてきたと整理している。

しかし、現在に至ると、産業社会・後期は内在的な問題を抱え込むことになる。それは、“生産性が上がりすぎた社会”という問題である。著者の見方によれば、現代日本社会では「生産過剰」のために「雇用の総量が増加を続ける」という前提は困難であり、結果として、若年層の失業や、格差や貧困などの「過剰による貧困」が生じたとしている。また、困難は若年層に限定されない。本書では、首都圏のサラリーマンについても言及されている。すなわち、「ラッシュアワーの異様な混雑と長い通勤時間、長い労働時間と残業、良好と言えない住環境等々といった多くの負の要素」は、これまでは「マクロの経済成長あるいは個人レベルの所得の向上によって改善・解決していくもの」（“成長による解決”）と見なされてきたが、「そのような路線を続けていった先にも必ずしも実現するものではないということ」に、「人々が気づき始めているが現在ではなかるうか」と言及している。豊かな社会においては、生産性の向上だけでは必ずしも人びとの生活は改善されない。ここで著者により提起されるのが、産業社会・後期から「定常型社会」への移行である。

本書の主題は、「定常化」と「創造性」とが結びつく可能性を描き出すことにある。著者はこれを人類史という射程のなかで、資本主義社会を位置づけることで試みる。著者は、これまでの人類史において定常化と呼べるものが2度あったという仮説をたてている。このうち、一度目は5万年前（狩猟・採集社会の成熟・定常期）における『文化の大爆発』、二度目は1500万年前（農耕社会の成熟・定常期）における『枢軸時代／精神革命』である。そして、人類史を拡大・成長と定常化とを繰り返すものと捉え、このうち定常化の時代に、『物質的生産の量的拡大から、質的・文化的発展へ』という転換が起こっていたものと推論している。そして、これまで人類史に現れた定常化と同様のものとして現代社会における生産過剰を捉え、定常期における創造的な社会の可能性が検討されることとなる。

著者が現代の定常化において創造の可能性を見出しているのがローカルなコミュニティである。すなわち、現代の定常化社会においては、産業社会で重視されてきた“進んでいる”、“遅れている”という側面が重要とは見なされなくなり、『時間』に対して『空間』、『歴史』に対して『地理』が優位になると指摘している。そして、地理的な多様性の一つの現れとして、地域におけるコミュニティの創造に着目している。

本書の話題は、人類史というマクロな視点から、現代におけるローカルなコミュニティというミクロな視点にまで及び壮大である。そのスケールを捉えることは容易ではない。しかし、今後の社会像を検討するうえでのヒントが随所に含まれていることは間違いない。（小熊 信）